



ぼくの“ふわふわの”

石井 睦美

ぼくには、とても大切にしているものがある。ぼくが小さかったころ——幼稚園のとき——からだから、もう二年くらいずつとんだ。

ぼくがそんなふうになると、おねえちゃんは、「あんだ、まだ小さいじゃん」って、きまってる言う。

おねえちゃんとぼくはふたつしかちがわない。だから、ぼくが小さいなら、おねえちゃんだって小さいはずだ。だけど、おねえちゃんはいつだって、「あたしは、もうおねえさんだから」っていばるんだ。

そんなことより、ぼくが大切にしているものがなにかつていうと、それは“ふわふわの”だ。

ふわふわのなにか、じゃなくて、ふわふわの、なんだ。ぼくの“ふわふわの”は、もとおねえちゃんの“ふわふわの”だった。

おねえちゃんの“ふわふわの”だったときは、そのあとに、えりまきつていうのがくついていた。ちょうどそれに、しつぽがくついていたみたいに、ふわふわのえりまきつていうふうになる。それから、

おねえちゃんの“ふわふわの”だったときは、しつぽだけじゃなくて、あたまもついていた。ちょうどそれに、あたまがくついていたみたいに、きつねのつていう。

そう、それがおねえちゃんの“ふわふわの”だったときは、それは、きつねのふわふわのえりまきだったんだ。

おねえちゃんがいまよりもっと小さくて、ぼくが赤ん坊だったころから、寒くなると、おねえちゃんのくびにいつもまかれていたきつねのふわふわのえりまきだった。

あるとき、おかあさんが洗濯機でそれをあらったら、全体がびよーんと長くなっていた。それで、きつねのふわふわのえりまきは、きつねだかなんだかわからないふわふわのえりまきだったものにかわった。

「ずいぶんのびちゃったわね」

と、おかあさんが言った。

「顔もへん」

と、おねえちゃんは言っていて泣いた。

ぼくがあははって笑うと、

「のぶゆきのばか！」

と、おねえちゃんは言った。

ぼくはおねえちゃんが泣いたから笑ったんじゃない、そのきつねだかなんだかわからないふわふわのえりまきだったものがおかしかつたから笑ったのに。

「みいちゃん、それ、もうできない？」

と、おねえちゃんがおかあさんに聞いて、

「できないことはないけど、ちよつと長くなりすぎたかも」

って、おかあさんが言ったから、ぼくは、

「じゃあ、それ、ぼくにちょうだい」

って、言った。

「なんで？」

と、言ったのはおねえちゃん、

「わかった！」

と、言ったのはおかあさんだった。

「のぶくんはそれで、こしよこしよするの。そうでしょう？」

「うん」

と、ぼくは言った。

「やっだあ」

と、おねえちゃんが言った。

ぼくはずつと前から、夜ねるとき、綿のきれはしをちよつともらつて、それでほつたをこしよこしよしながらねむった。そうすると、ひとりでもちゃんとねむることができる。おねえちゃんは、そんなぼくを笑うけど、おねえちゃんなんて、一年生になるまで



網中 いづる／絵



おかあさんについてもらってねてたんだ。一年生になってからだって、ときどきそうしていた。

「どうするの？ あげるの？ あげないの？」

それはまだ、おねえちゃんのきつねだかなんだかわからないふわふわのえりまきだったものだから、おかあさんはおねえちゃんにそう聞いた。

「どうしようかなあ」

と、おねえちゃんが言った。

ぼくが笑ったから、いじわるしてるんだ。

「あげないの？」

と、おかあさんがもう「度聞くと、

「いいよ」

と、おねえちゃんは言った。

「ありがとう」

と、ぼくは言った。

その夕方、おかあさんがごはんのしたくをしているとき、

「のぶくん、いいことしてあげる」

と、言つて、顔の横でハサミをうごかした。

「なに？」

「こうするの」

そう言つておねえちゃんは、ぼくのものになったきつねだかなんだかわからないふわふわのえりまきだったものを、切りはじめた。きつねがとれて、なんだかわからないふわふわのえりまきだったものになった。しつぽがとれて、なんだかわからないふわふわのただのえりまきになった。

おねえちゃんはえりまきをいくつかに切つて、ちいさなハンカチ

くらいの大きさのをなんまいか作つて、ぼくにくれた。

「ぼくのふわふわのだ！」

大きな声でぼくは言った。

「これは、のぶくんにあげるからさ」

と、おねえちゃんが言った。

そのあと、おねえちゃんは、あたまとしつぽとふわふわで、かわいいきつねのぬいぐるみをひとつ作つた。

「きつねくん。これはあたしの」

と、おねえちゃんは言った。とてもうれしそうに。

その夜からずつと、ぼくはぼくの“ふわふわの”といつしよにねむっている。こしよこしよしたりにぎつたり。ふわふわの“といつしよだどぐつすりねむれる。

「あんた、まだ、小さいからね」

つて、おねえちゃん言うけど、一年生のぼくは、もうとつくにひとりでねむる。

それから、おねえちゃんも、ひとりでねむっている。あ、ちがうかな。おねえちゃんはきつねくんといつしよだから。



石井 睦美 (いしい むつみ)
作家。神奈川県生まれ。出版社勤務を経て執筆活動に入る。『五月のはじめ、日曜日の朝』で花いちもんめ小さな童話大賞・新美南吉児童文学賞、ペンネーム・駒井れんで執筆した『パスカルの恋』で朝日新入文学賞を受賞。『卵と小麦粉それからマドレーヌ』『レモン・ドロップス』『白い月黄色い月』ほか著書多数。